



# あいさつ運動

1日目標  
10人以上

『ノースネット青少年』  
能登川地区は、東近江市の北部に位置するので「north=ノース」(北)、そして能登川の能(のう)を掛け合わせて「ノース」。同じ目的によってつながっている網状の組織「network=ネットワーク」の「ネット」をそれぞれ取り入れ、平成21年に愛称となりました。

入園(学)式、運動会・体育祭、二学期・三学期始業式、卒園(業)式の朝に子どもたちの登園(校)時間にあいさつ運動を実施しています。

## ● 運動会・体育祭



## ● 3学期 始業式

新年最初の「あいさつ運動」



## ごあいさつ

東近江市青少年育成市民会議 能登川支部  
支部長 田井中 与弘

平素は、青少年育成市民会議能登川支部の活動に深いご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、当支部は、『地域の子どもは、地域で守り育てる』を合(愛)言葉に、次世代を担う青少年の健全育成を目的に「あいさつ運動」を活動の柱として「愛のパトロール」「青少年育成大会」など様々な活動を展開しています。

また、2年目となる活動として、「青少年の地域事業参画の普及・推進」を進めてきました。子どもたちが行事やイベントのスタッフとして

地域の方々との交流し、その体験を通して成長し自立する機会を与えていただいたと思います。今後も更なる取り組みを期待します。

青少年育成大会では、中学生による司会、そして善行青少年やあいさつ運動啓発ポスター、青少年の主張作文、吹奏楽部による演奏会で子どもたちは大変活躍してくれました。また今年は、水循環政策本部、国土交通省、都道府県主催全日本中学生水の作文コンクールで「優秀賞」、また、警察庁主催「大切な命を守る」全国中学・高校作文コンクールでは「警察庁長官賞」の受賞者もでました。おめでとうございます。子ども達の活躍を大変素晴らしいと思います。当支部はこれからも子どもたちを見守り、一人ひとりが力を発揮できる活躍の場のお手伝いが出来ればと思います。

最後に、私たちの活動は「地域の力」なくしては語れません。どうか市民の皆さまの温かいご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

## ● 愛のパトロール



各種団体の皆さまのご協力を得て、パトロールを行っております。「安全・安心のまちづくり」を目指し、今年も引き続きパトロールをまいります。

地域の皆さまご協力ありがとうございます。

## ● こども110番の家



子どもたちが登下校時等において、万が一、危険な状態に陥った時、すぐに避難できる場所として「こども110番の家」を設置しています。

## ● 電柱幕の交換

古くなった電柱幕の交換をしています。街で古くなった電柱幕を見かけたら事務局までご連絡ください。



## ● 五峰興風会様からの助成

公益財団法人五峰興風会様から助成いただき、のぼり旗とあいさつ運動啓発ポスター参加賞を購入。また、ふれあいラジオ体操カードを作成しました。



# 能登川地区 青少年育成大会

～大人が変われば子どもも変わる～

令和7年11月1日(土)、能登川コミュニティセンターホールにおいて、家庭・学校・地域が連携して青少年の健全育成に取り組むことを目的に開催しました。約330名の地域の皆さまにご来場いただき、盛会裏に終えることができました。



## 開会



司会  
能登川中学校2年  
中村 百々心 さん  
藤田 和心 さん



開会あいさつ  
青少年育成市民会議  
能登川支部長  
田井中 与弘



来賓あいさつ  
能登川支所長  
谷口 哲雄 氏

## 表彰式

### 善行者表彰

親切や思いやりのある行い(善行)をした青少年を表彰しました



能登川中学校

2年 小林 京生 さん      2年 上田 怜吾 さん  
2年 若林 優羽 さん      2年 星田 心咲 さん

林中央公園で熱中症により動けなくなった小学生を発見し1人は中学校へ戻り助けを求め、教員が駆け付けるまでの間、小学生の看病をおこないました。

## 演奏会

3年生が引退し、新チームになって初めてのステージ。最初の音がでるまで子どもたちは緊張した面持ちでしたが、演奏が始まると、緊張の中にも新体制らしいフレッシュで力強い音色が響きわたり、演奏会は盛会に終わりました。



能登川中学校 吹奏楽部



すてきな演奏を  
ありがとうございました

## 「あいさつ運動啓発ポスター」表彰

能登川中学校の生徒を対象に「あいさつ運動」の啓発ポスターを募集し、今年は190点の応募の中から、最優秀賞、優秀賞、入賞の計10名の入選者を表彰しました。また、奨励賞を含む20点を1階ロビーにて展示しました。



展示の様子



## 作文発表

青少年の主張作文では、能登川地区の4小学校、中学校、能登川高等学校を代表して、家族や友達との関わりの中で感じたことや自分の思い、未来への希望や夢などを発表していただきました。また今年は、第47回「全日本中学生水の作文コンクール」で優秀賞を受賞された作文を発表していただきました。

『青少年の主張』

『水の作文コンクール』



能登川東小学校  
6年  
竹田 琴羽 さん



能登川西小学校  
6年  
橋本 隆翔 さん



能登川南小学校  
6年  
北村 葵月 さん



能登川北小学校  
6年  
中島 菜乃 さん



能登川中学校  
3年  
辰巳 佳奏 さん



能登川高等学校  
1年  
西本 壮哉 さん



能登川中学校  
3年  
谷澤 あかり さん

## 『私の夢』

能登川東小学校 6年 竹田 琴羽 さん

みなさんは、命と聞くと、何を最初に思うかおぼえますか。何を思うかおぼえるかは人それぞれで、みんな意見がちがうと思います。

私は命と聞くと、産んでくれたお母さんや、出産の手助けをしてくださった助産師さんのことを思うかおぼえます。私は、そんな助産師さんにあこがれ、今自分なりに助産師さんになれるように努力しています。

私の家は、去年の3月に新しく妹が生まれました。数日後に、妹とお母さんのいる産婦人科へ行き、ガラス越しに妹が寝ているのを見ました。すごく可愛く、愛らしくて、生まれてきてくれてよかったなど心の底から思いました。お母さんと妹が家に帰ってきた際に、

「助産師っていう人たちがサポートしてくれて安心した。」と母が言っているのを聞きました。その時はまだ、助産師の仕事についてあまり知りませんでした。そこで、看護師と保健師の免許を持っているおばあちゃんに話を聞いたり、自分で調べたりしました。助産師さんの仕事や、どうしたら助産師さんになれるかを調べていくうちに、助産師さ

んて、こんなにすごいんだ、すてきな仕事だなと思いました。

今私は、1才3ヶ月の妹の世話を一生懸命しています。赤ちゃんのことを今のうちから知っておこうと思い、妹のご飯のお世話をしたり、遊んだり、お風呂に入れたり、たくさんのお手伝いをしています。

助産師になるためには、まず看護師の国家資格を取得し、その後助産師養成課程のある学校で学び、修了する必要があります。そして、助産師国家試験を受験し、合格しなければ助産師になれません。また、助産師の仕事は命に係わる仕事なので、学ぶことが非常に多く、なるために何年もかかります。そのためにしっかり勉強をして、将来につなげたいです。学ぶことが多い分、助産師になるのは大変かもしれないけれど、家族も応援してくれているので、努力していきたいと思います。

今、子どもを産む人が少なく、人口が減ってきているので、将来、子どもがいる幸せや、赤ちゃんのすてきなところをたくさんの人に広められるような助産師さんになりたいです。そして、これから生まれる子どもが幸せに生きていける社会をつくっていきたくたいです。

## 『戦後80年の今思うこと』

能登川西小学校 6年 橋本 隆翔 さん

日本が戦争を終えてから80年がたったことをテレビのニュースで知りました。

「戦争」という言葉は、もっと小さい時から知っていましたが、どういことが行われていたのかは、全く知りませんでした。でも今年6年生になり、社会科や国語科の学習で、戦争について知る機会がありました。中でも、原子爆弾は、一瞬で多くの人たちの命を奪うものだと知り、そんな残虐な兵器が実際に使われていたなんて、今でも信じられません。自分の家族や友達が急にいなくなると想像すると、絶望的な気持ちになります。そして、その絶望の中、生きていけないといけないうその後の生活のことも考えると、当時の人は本当に辛かっただろうなと思います。3年生の時に学習した、昭和の暮らしを思い出すと、今とは全く違い、物が少なく、とても不便そうだったので、ただでさえ不便な上に、ばくげきにもあって、家族や友達を亡くしてしまったら、僕なら、その後の生活に希望がもてず、自暴自棄になってしまいそうです。

戦争の時は、いつどこで命をうばわれるか分からないという毎日を過ごさなければいけません。今も、ウクライナとロシアやイスラエルとイランなどが戦争をしています。僕たちと同じ子どもたちが、毎日こわい思いをして生きていると考えると、悲しくなります。こうした思いになることがわかっているのに、なぜ戦争をするのでしょうか。僕には分かりません。僕は、世の中から戦争を無くしたいです。僕一人の力では、無くすことは難しいかもしれませんが、でも、小学生の僕にでもできることが何かあるんじゃないかと考えました。

まずは、自分とは違う考えや文化を受け入れることが大切だと思います。前に、動画で、外国の人を悪く言っている人を見たことがあります。例えば、日本ではお茶わんを持って食べますが、国が違えば、お茶わんを持つのはぎょうぎが悪いと考えられているところもあります。このように、当たり前と思っていることが、国によって、または人によって、違うということが、いっぱいあるのだと思います。相手を知らないことで、ケンカになってしまうことが、あるのだと思います。僕は、「こうした文化や考えもある」と、違うところも受け入れることが大切だと思います。僕自身、外国の文化は少ししか分かっていません。いつも一緒にいる友だちとも、考えが違うことが、あると思います。違いがあったときにはびっくりするかもしれませんが、理由があるんだなと、考えるようにしたいと思います。違いを見つけてびっくりした時も、相手が嫌な気持ちにならないように、気を付けたいと思います。

それから、もしケンカになっても、話し合いをすることが大切だと思います。自分だけが得をするような、自己中心的な考えをやめて、みんなが嬉しい気持ちになるよい方法を話し合ってみようと思いたいと思います。そのためには、他の人の考えをよく聞くようにしなくてはなりません。学校でも、みんなが納得できる答えをだせるようにしたいと思います。

このように、戦争のことを知り、他の人のことを想って違いを受け入れたり、話し合いをしたりしていくと戦争は無くなっていくと思います。今年で戦後80年。戦争を無くして、みんなが笑顔になれる世の中にしていきたいです。

## 『先入観というかべをなくすために』

能登川南小学校 6年 北村 葵月 さん

みなさんは、人を見ただ目で判断していませんか。また、自分がこうだと思ったことを相手におしつけていませんか。

私は黒色のランドセルを持っています。入学する前に、お店に並ぶたくさんのランドセルの中からキラキラと光るこのランドセルをみつけて買ってもらいました。学校に行くと赤やピンク、水色や茶色のランドセルを持っている人がいました。ある男の子が、

「なんで女の子なのに黒いランドセルなの？」

と聞いてきました。周りを見ると黒いランドセルを持っているのは、男の子ばかりで、女の子はだれ一人いませんでした。なのでどう答えればいいのか分からず、何も言えませんでした。ただ、モヤモヤした気持ちが生まれせいかく気に入って買ってもらったランドセルをきれいになりそうになりました。家に帰って母にその話をすると、

「お母さんが子どものころは、ランドセルは赤と黒の2色しかなかったんだよ。男の子は黒で女の子は赤を持つのがふつうだったんだよ。」

と母はいいました。そのとき私は、

「ふつうって何だろう。」

と思いました。今、6年生になり黒色のランドセルは変わらず大切にしていますが、色への先入観はだれもが持っているのかなと思いました。

他にもかみ型や服そうでその人の性別や、性格を決めているような気がします。かみをのばしたり、結んだりするのは女の子で丸坊主にしたり、結ばないのは男の人だけだと決めつけていませんか。これも少し前までは当たり前

の社会だったけど、今は変わってきているように思います。テレビに出ている芸能人やインターネットのユーチューバーの中には、男の人でもかみが長かったり、結んでいたりする人もいます。反対も同じで、女の子も丸坊主だったり、かり上げている人もいます。それでも、後ろ姿だったらどうでしょうか。見た目で性別を決めつけていませんか。

「なんだ、女の子だったんだ。」

とか、

「えっ、男の人なの？」

と私は思ったことがあるのでいけないと感じました。

最近では、中学校や高校の制服が選べるようになったと姉から聞きました。女の子でもスカートじゃなくてズボンをはいてもいいそうです。きっと逆もいいはずですが、スカートをはいている男の子はなかなか見ません。私は、

「それもいいのにな。」

と思っています。少しずつ、社会が変わるなかで、多様性という言葉をよく聞くようになりました。私が子どものころ好きだったプリキュアというアニメでは、初めて男の子プリキュアが登場しました。また、高校野球では甲子園で女子部員が初めて練習することができるようになったそうです。

私達は、自分が当たり前だと思っていることが、当たり前じゃないかもしれないと気づかないといけません。人の心の中は見えないから、〇〇は〇〇と決めつけてはいけません。私も先入観にとらわれないように、相手がどのような人なのか考えて関わっていきたいです。

## 『あきらめずがんばることで』

能登川北小学校 6年 中島 菜乃 さん

私は今6年生のみんなと協力しながらリーダー活動がんばっています。能登川北小学校では、自分の学校をよりよくするための活動をおこなっています。例えば委員会活動では、あいさつ運動をしたり、みんなが楽しめる全校あそびを考えたりしています。小さな学校なので、4年生からリーダーとして中心に動く機会がたくさんあります。6年生になってからは運動会など大きな行事に関わるが増えました。運動会では今年から始まった応援合戦を6年生みんなで、一からつくりあげました。これらのリーダー活動を通して協力することの大切さを学んだのでこの気持ちを作文に書こうと思いました。

今では友達と自然に協力をしながら物事を進めていきますが、始めからそううまくはいきませんでした。例えば、応援合戦を低学年に教えるときに進め方にこまっていたときがありました。それは初めての練習のときです。私が1・2年生と練習をしているときに1年生の中にはずかしくて応援練習に取り組めなかった人がいました。そのときは自分でもどうすればいいかわからなくなって練習がなかなか進まずに、終わってしまって全体をうごかせなくなったときがありました。また、学年全体での合同練習では高学年と低学年で進んでいるところがバラバラで、計画していた通り

の練習ができなかったり、笛の合図で合わせないといけないうところがなかなかできなかったりと、思いどおりに練習をすすめられなかったことが何度もありました。

しかし、私はあきらめずにみんなと協力してのりこえていきました。6年生で話し合って1年生には一人6年生がついてあげることにしました。そうやって練習をしていくことで自信を持って最後にはしっかりと声を出してくれるようになりました。合同練習でバラバラになってしまったときも、6年生とそうだんして、毎日ていねいに最初からゆっくり声や動きを合わせたり、不安なところをくり返し練習をしたりして、みんなとかんぺきに合わせられるようになりました。

これらの経験をして私は協力とは心細い気持ちを強く変えることができると思います。なぜなら、最初は失敗ばかりだった応援練習も、6年生のみんなと協力することで成功ができたからです。反省をくり返してみんな最後までやりとげることで味わえる達成感を6年生の仲間たちともっと共有していきたいです。また、中学校で出会う新しい友達とも助け合ってすごしていくために私は何事もあきらめず、みんなの意見や思いを受けとめられる人でありたいです。そして、今周りにいる心細い気持ちを持っている人を心強い気持ちに変えていきたいです。

## 『いのちの単位』

能登川中学校 3年 辰巳 佳奏 さん

突然ですが、自分自身に問いかけて下さい。貴方は会話や冗談の中で「死にそう」「殺すぞ」といった表現をしたことが、一度でもありますか。では私は、一度でもあると答えた人に問いかけます。その発言をした貴方は、その表現が指し示す意味を考えたことがありますか。

正直なところ、私は使ったことがあると思います。無意識のうちに、深く考えもしないで口にしていました。ですが、このことについて考えているうちに、たくさんの方がこの言葉を使っているの気がきました。すると今の世間は感覚麻痺を起こしているように、私には見えます。でも、なぜ私がそのことについて考えるのか。きっかけは、私が出会った一冊の小説にありました。

その小説は「戦争」を題材にした作品でした。読み終わってもなお残る思いがありました。ですが印象深かったのは、私の脳内で呟っていた主人公の声「今の時代は死が身近じゃないから」という言葉でした。本を閉じたあと、もし日本が今戦争をしていたらどうだろうと考えました。修学旅行で学んだように、かつての日本では多くの命が失われ、生きたいのに生きることを許されなかった人達が大勢います。生きることを諦めなくてはならなかった人がいることを学んだにもかかわらず、「死」という言葉を軽く扱うことの重さ。そこまで考えた私はふと、昔の出来事を思い出しました。

小さい頃、私には大好きなピアノの先生がいました。みんなからも人気な先生でしたが、突然ピアノ教室で姿を見

ないようにになりました。しばらくして母に連れられた所は、当時の私はとても暗く感じるところでした。あの時に見た周りの人の顔はよく覚えていません。そしてその日が、ピアノの先生を見た最後の日です。

今なら、そこがどういう場所か、どんな意味を持つのかを知っています。でも、年齢を重ねたから全部理解している訳ではないことに気づきました。もしかすると、無自覚に全て知っているふりをしているのかもしれない。死というものが、どれだけ重くて、大きくて、苦しくて、つらくて、悲しいものかを、私は考えたことがなかったからです。

私は大切な人たちに囲まれて、毎日幸せな生活を送っています。そして多くの人には私と同じように、大切な人がいると思います。それが当たり前だと感じられる平和な世の中だから、「死」という言葉も簡単に使うようになってしまいました。死ぬ、殺すといった言葉は、相手に向けて伝える言葉ではありません。軽々しく口にのせる言葉ではない、私はそう学びました。

貴方は「今のはだめだろう」と思った気持ちに蓋をして、聞き流していませんか。人を傷つけるような言葉を耳にしても、気にしないようにしていませんか。この思いを文字にした私は、今日から言葉に責任を持ちます。こうして一人ひとりが意識をしてみると、少しでも世界が変わっていくのではないのでしょうか。こうした心がけが、思いやりの連鎖になっていくと信じています。

貴方がまず、ちょっとでも前向きな言葉を口にするようにしてみてください。それが前向きな社会をつくっていきける一歩になるかもしれません。

## 『私の青春』

能登川高等学校 1年 西本 壮哉 さん

私の青春は、演劇です。私が中学生の時、学校で開催された芸術鑑賞が、私と演劇との初めての出会いでした。初めて観る演劇に感動し、他の舞台も見に行きたいと思いましたが、チケット代も高く、その機会もありませんでした。ですが、中学2年になり、たまたま隣の席になった友人が演劇をしていることを聞きました。自分が演劇に興味があることを話すと、その友人が出演している公演を一度見に来ないかと誘われました。演劇が行われたのは大きなステージではありませんでしたが、友人が楽しそうに演じている姿がとても輝いて見えました。役者の方々の熱意を肌で感じ、演劇の素晴らしさや奥深さに、あらためて気づきました。それを機に、演劇の見学会に顔を出すようになり、私の演劇人生が始まりました。

私が今所属しているのは「NPOはまかる」という団体の中の、「STAGE!!」という中学生と高校生併せて12人のグループです。所属してすぐに、半年後の公演に向けて、練習が始まりました。メンバーのほとんどは小学生から始めているので、私はみんなに少しでも早く追いつけるよう練習に励みました。声を出すこと自体は、中学生の頃に運動部に所属していたこともあり、苦労はありませんでした。しかし、セリフを覚えることや、場面転換の動きのタイミングを把握することにとても苦労しました。

中学3年の11月の公演が、私にとって初舞台になりました。

タイトルは「ハッピーエンドの向こう側」という戦争を題材にし、それをファンタジーにおとしこみ、ポップに表現した物語です。任せてもらったのは、父親役で、子供に対して人生を語るシーンでは、長台詞だったけれど、「行きなさい。父さんはいつでもお前を応援している」と言って子供の背中を押すかっこいい役柄でした。いつもより大きな舞台上で観客を前にとっても緊張しましたが、仲間の支えもあり、何とか無事に演じることができ、少しでも自信を持つことができました。

実際に演者として演劇を始めてみて、演じる側の難しさを知りました。役者同士での目線でのコミュニケーションや、台本がない状態でのアドリブなど、観客として見ていた時には気づかなかった様々な課題に直面しました。しかし、講師の方の厳しくも優しい指導と、良い作品を創り上げたいという仲間の熱意や思いが私の支えとなり、練習に励みました。

私にとって2回目となる公演では、本番前にケガをしてしまい、いつ復帰できるかわからない状態でしたが、講師の方や仲間の協力のおかげで、以前よりも良い演技ができたと思います。観に来ていただいたお客様からの評価も「良い声だった」とお褒めの言葉を頂き、また少し自信を持つことができました。

能登川高校に入学して半年、新しく出会った友達と高校生活を楽しみながら、また一方で同じ目標を持つ地元の演劇仲間と活動を続けるという充実した日々を送っています。

演劇と出会えたおかげで、私は今青春を謳歌しています。

水循環政策本部、国土交通省、都道府県主催  
 全日本中学生 水の作文コンクール 優秀賞  
 『川の始まりと水の未来』

能登川中学校 3年 谷澤 あかり さん

みなさんは「川の始まり」を見たことがありますか？

私が住んでいる滋賀県では小学4年生になると「やまのこ」と呼ばれる森林体験学習があります。やまのこでは、近くの山や森に行き、間伐体験や森林散策を通して自然の大切さや保全活動の意味などを学びます。

私も4年生の時に市外の山でやまのこ学習を受けました。森林散策で遊歩道を歩くとやがて岩肌から水滴が滴る場所に着きました。

案内人のおじさんが私たちの方を振り向いて説明を始めました。

「皆さん、この岩から滴っている水滴が見えますか？これは、川の始まりです。山に雨が降ると雨水が土の中に染み込みます。雨水は何十年もかけて土の中を通り、こうして地表に出てきて、川になるんですよ。山は沢山の雨水をためるので「緑のダム」とも言われています。緑のダムによって雨水は濾過されてきれいになるんですよ。山と水は深くかかわっていて、きれいな水を守るには、健やかな山を守ることも大切なのですよ。」

私は目の前で滴る水滴がやがて川になり、湖に流れ、海の一つとなり、また雨として降る長い過程を想像して、水の雄大な旅に感動しました。

やまのこで川の始まりに会ってから、私は環境保全活動に興味を持つようになりました。

一昨年春から、年に1回行われる近所の川の清掃活動に参加しています。活動では主に外来種の水草抜きや川底に溜まったヘドロの掻き出しなどを行っています。

清掃活動が始まり、早速スコップで泥を掻き出そうとすると泥の中からカツンと硬い手ごたえがしました。何だろうと思って水中からそれを引き上げると、なんとジュースの

空き缶でした。驚いて周りを見ると、私の他にもゴミを持っている人は何人かいました。その後も所々でゴミを見つけ、いつのまにか活動内容の中心はゴミ拾いへと変わっていきました。活動が終わる頃にはなんとゴミ袋4袋分のゴミが集まりました。

私は身近な環境が人によって汚されていたことを知り、心が痛くなりました。今日拾ったゴミやこれまで川を流れていったゴミが環境に大きな悪影響を与えたことを考えると恐ろしくて鳥肌が立ちました。

清掃活動を行った翌日、川を見に行くとマガモの親子、シラサギ、ホンモロコの群れなどが見られました。心なしか、川の生き物たちもきれいな川に喜んでるように見えました。私はその瞬間昔見た「川の始まり」を思い出し、川だけでなく水の旅路全てをきれいにしたい、人間を含む、水と共に生きている生き物を幸せにしたいと思いました。

私は水を守るためにわたしにもできることを二つ考えてみました。

一つ目は森林を育て、「緑のダム」を豊かにすることです。植樹体験や間伐体験に積極的に参加し、きれいな水源の源となる健やかな森林を育てていきたいです。家族や友達、地域の方にも呼びかけ近くの山から健やかに活性化させたいです。

二つ目は水の大切さを様々な人に教えることです。水に関するポスターを作って公民館や市役所など公共の場所に掲示したり、水についてのクイズなどをSNSに投稿したりすることで多くの人に水に関心を持ってもらいたいです。

私は4年生の頃に見たあの小さな雫を今でも覚えています。いったん「緑のダム」に染み込んだ水が濾過されて再び地表に流れるには40年ほどの月日がかかるそうです。今私たちが汚した水も、大切に使った水も、長い月日を経て未来の私たちに戻ってきます。私は水を守りたい。私が大人になっても、川の始まりの雫が美しく輝くように。

一言メッセージ



能登川地区の4小学校6年生と能登川中学校3年生による、一言メッセージを展示しました。

令和7年度 「あいさつ運動」 啓発ポスター入賞者

順不同

受賞者一覧

最優秀賞



3年 大橋 彩乃 さん

優秀賞



1年 田路 千紗 さん

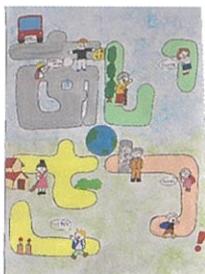


2年 中川 湊太 さん



3年 杉森 碧心 さん

入賞



1年 井ノ口 倅梨 さん



2年 菅山 果乃 さん



2年 日根野 結菜 さん



2年 松浦 夏季 さん



2年 我喜屋 莉愛 さん



3年 出口 優芽 さん

奨励賞



1年 井上 優実 さん



1年 河村 朱莉 さん



1年 小南 守瑠 さん



1年 古牧 知華 さん



1年 葛西 航平 さん



1年 押谷 航琉 さん



1年 加藤 慎太郎 さん



2年 西村 梨那 さん



2年 梅村 彩香 さん



3年 居原田 柚乃 さん



最優秀賞作品は、啓発ポスター用に印刷し各自治会等の掲示板に掲示しています。

善行青少年の推薦について

当支部では、下記の事項について他の模範と認められる青少年（個人及び団体）を表彰しています。各小学校・中学校・高等学校等へ推薦依頼をしていますが、地域の皆さまからの推薦も受け付けています。下記に該当するような善行青少年がおられましたら、事務局までご連絡ください。

救護活動	人命救助、防災、防犯、事故防止などのための活動および自然災害の発生時に救護活動に尽くしたもの。
環境美化	公共の施設や場所の環境美化に尽くしたもの。
奉仕活動	奉仕活動やボランティア活動に尽くしたもの。
地域活性化	地域住民、地域事業の交流を積極的におこない地域の活性化に尽くしたもの。
その他	賞賛に価する善行のあったもの。

「一日一日大切に生きてい」交通事故遺族の思いを作文に紡ぐ

警察庁主催「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクール  
警察庁長官賞 受賞



## 『「いのちの学習」で学んだこと』

能登川中学校 3年 阪田 ひかり さん

もう一度でいいから愛する人の笑顔、声、温もりに触れたい。大切な息子さんを二十年前に亡くされた田中博司さんの言葉が今でも忘れられません。当時二十三歳だった息子の幹弘さんは、友人が運転する交通事故で、還らぬ人となりました。事故の原因は居眠り運転でした。

私には父母、そして二人の姉がいます。猫も四匹いる大家族です。田中さんの講演を聞きながら、頭の中で自分の家族に置き換え、「もしもお父さんが今日、事故にあったら」「お母さんのご飯が二度と食べられなくなったら」と考え、涙があふれそうになりました。

当たり前の日常が、当たり前でなくなる。想像もできないくらいの恐怖が私を襲いました。朝起きると、ダイニングには朝食があり、姉の弁当がキッチンに並んでいる光景。「早く用意なさい」と急がされながら、朝の準備をし、友人と登校する毎日。学校が終わり、大好きなサッカーの練習を終えると灯りのついた家に帰る日々。姉とスマホの写真を見せあいながらお菓子を食べる時間。何気ない毎日を過ごしている私にとって、田中さんの話は衝撃的で、信じられないものでした。

「遺族」という言葉は、単に残された家族という意味だけでなく、その家族の悲しみや苦しみ、後悔そして無念、様々な想いを含んでいるのだと感じました。毎日ニュース

で報じられている事故の情報は、どこか遠い存在のものと思っていましたが、田中さんの言葉から、一日一日を大切に生きていかないといけないという考えに変わりました。

講演を聞いた日、母に田中さんの話をしました。普段、授業の話の家ですることは少ないのですが、その日は私の心の中にある不安な気持ちを誰かに伝えておきたいという衝動に駆られました。母は、家族が急にいなくなるのは耐えられないと言い、私も同じ気持ちだったので、少しホッとしました。そして、まずは、事故の被害者にもならないように自分たちの出来ることをしようと約束しました。

大切な家族の死を受け入れることはとても時間がかかると思います。そして、他の誰かが同じ悲しみを繰り返さないようにと活動することは、その度に家族の死と向き合い、当時の記憶が鮮明に蘇るとも苦しい時間だと思えます。その苦しみよりも、中学生の私たちに「命の大切さ」を伝えることが重要だという想いから、講演していただいた田中さんの気持ちをしっかりと受け止めないといけないと思いました。毎日交わす「おはよう」「いってきます」「ただいま」という、ごく当たり前の会話も、家族が元気に生きている証なのだと感謝し、今日も明日も明後日もその先もずっと続くようにお願いしながら「おかえり！」と家族を笑顔で迎えようと思います。

## 令和7年度 滋賀県青少年育成県民会議 顕彰者表彰

令和7年11月8日(土)能登川コミュニティセンターホールにおいて、地域や現場等で青少年の健全育成に尽力された方の表彰式がおこなわれました。

### 青少年指導者

田中 信雄 さん



平成16年に能登川西小学校区地域教育協議会が発足し、発足当初から現在に至るまで、地域で子どもを育てる環境づくりや体験活動に取り組まれています。

平成25年からは代表として、笑顔であいさつ「さわやかロード」に積極的に取り組み、「あいさつ」を通して児童だけでなく、保護者をはじめ地域の方々や子どもたちの環境づくりや人と人とのつながりを大切にされています。

### 青少年育成指導団体

能登川地区子ども会指導者連絡協議会



昭和47年の発足時から現在に至るまで、能登川地区の各自治会子ども会の組織発展ならび活動の促進に尽力されています。

能登川地区子ども会主催による、外来魚駆除魚釣り大会や手作り教室、レクリエーション大会、スポーツ体験教室を開催するなど、地域や年齢の違う子どもたちとの交流や、体験の場・学びの場を提供し、青少年の健全育成に尽力されています。



田中 信雄 さん(左側)  
地区子ども会 会長  
小松 安希子 さん(右側)